

赤煉瓦ネットワーク……

赤煉瓦ネットワーク顧問 田村明

あれはいつのことだったろう。初めて赤レンガの建物を見たのはずいぶん昔のことになる。戦前の東京には、関東大震災で大きな被害を受けたとはいえ、あちこちに赤レンガの塀や建物が残っていたから、はつきりどれだという記憶はない。ただ、子ども心にも、赤煉瓦にはなにか独特の雰囲気と歴史の重みを感じたものである。

赤煉瓦で印象に残ったのは、戦争も終わり、幸いにも生き延びられたという思いで、初めて奈良・京都に古建築見学旅行で見た南禅寺境内の琵琶湖疎水水道橋だ。建築学科の学生だった私は、法隆寺、東大寺、薬師寺、桂離宮、修学院離宮、などたくさん日本の名建築や庭園を見て感動した。その後、東山の裾に広がる南禅寺を訪れた。石川五右衛門の「絶景かな、絶景かな」で有名な山門を潜る。その奥深い境内のまた奥に、突如として現れたのが、アーチの赤煉瓦水道橋だった。いままで見てきたものとは材質も構造も全く異質だ。「これは何だ」という一種異様な存在感があり、それがあたりの景観と緊張感をもって対峙する不思議な空間を創りだしている。疎水事業は、大学を出たばかりの若い土木技師の田辺朝郎が、お雇い外国人に頼らず、自前で西洋技術を駆使して工事に当たったのだが、景観の知識や感覚があったとは思えない。情熱をもって本物づくりを志した結果に生み出された空間だ。それが、今では京都になくはない景観の穴場になっている。

時を経て、私が横浜市に住むようになった一九六三年に近所を散歩しているとき、あまり人の行かない新港埠頭の保税地区にある長さ一五〇メートルの赤煉瓦倉庫に出くわした。異様な迫力がある。裏寂れたこの倉庫のあたりは、乱闘するヤクザの麻薬取引などの映画のロケの舞台としてよく使われていたのを思い出した。白黒映画では、暗鬱で陰惨な感じさえある。だが、直に見ると時代を超えた本物の凄さと、横浜の地霊を感じた。

その後、一九六八年に私自身が民間から横浜市に入った。この倉庫の話題も時々だが、まだ古い建築物の価値は認められていなかった。私が直接に横浜の「まちづくり」の仕事に携わってみると、関東大震災や空襲、接収などによって、文明開化の町・横浜を伝えるものがほとんど残っていないことに気がついた。こうした赤煉瓦の建物は、一度壊したら二度とは出来ない。「これは未来の横浜のために、どうしても残しておかなくてはならない」そう決心した。

たまたま何かの会合が、赤煉瓦倉庫が上から遠望できる少し高い所であったとき、飛鳥田市長が「田村さん、あなたはあの赤煉瓦を残したいと言っているそうだけど本気？」と聞く。「もちろん本気ですよ」と即答した。市長は続けて「ぼくなんか子供の頃から見慣れているけど、古臭くてちっともいいと思わないね」と言うのだ。港湾地区は独自の地区設定をしており、港湾局はほかの部局と一線を画している。港湾局をコントロールする運輸省では、すでに赤煉瓦倉庫を取り壊してコンテナヤードにする青写真もあるという。これは危ない。市長もこんな調子では簡単に壊されてしまふ。そうなれば後の祭りだ。

私はその日から、この倉庫が簡単に壊されないように綿密に仕組みをつくり、これを守ることが当面の課題だと企画課長に言い含めた。おそらく面食らったことだろう。数年間持ちこたえれば、時代は必ず評価する方向に動くはずだ。幸いにオイルショックがあり、日本列島改造論も後退し、古い建造物にも光が当たってくるまでその年数はかからなかった。危ないところをすり抜けたわけだ。

個性の乏しくなった横浜にとって、赤煉瓦倉庫は誇りになった。横浜市の「まちづくり研究会」の若い諸君が、たまたまやってきた舞鶴の人々に自慢して案内したら、「こんなものがそれほどの価値があるのか。それなら旧軍港だった舞鶴には幾らでもある」と言われる。舞鶴は赤煉瓦の街として個性を自覚して、「まちづくり」を進めることになる。

次第に次々と他の都市も加わって、「赤煉瓦ネットワーク」が誕生した。個性を喪失した日本の街では、市民は誇りも愛情も失っていた。しかし、時代の奥に生き残ってきた赤煉瓦が、人々に不思議な郷愁を誘い、その地霊を呼び覚ます「まちづくり」が始まってきた。赤煉瓦は建設された当時は、日本の空間には全く異質なものであったろう。それがいまでは、消えかかると日本の都市の個性が息を吹き返す役割をしている。「赤煉瓦ネットワーク」がおもしろいのは、多くの自治体職員が運営に当たっているが、職員としてではなく自立した市民の立場でネットワークを組んでいることだ。自治体職員がもっているノウハウや情報は活用するが、自由な時間に活動して組織には拘束されない。これまでの日本の社会では、いったん会社・官庁などの組織に入ってしまうと、個人としての立場を奪われ、全人格を拘束されることが多かった。これでは健全な市民社会は育たない。やっと日本の組織人でも、組織の活動とは別に自立した個人として活動し始めた運動であることを特筆してもよいだろう。自治体職員ももちろん一市民である。ほかの市民とも対等に人間として付き合えるのが「赤煉瓦ネットワーク」の市民社会だ。

赤煉瓦の霊が日本の組織に縛られた人々を解放し、自由な連帯を可能にし始めた。古い遺物のように見えた赤煉瓦が、これからの時代に求められる新しい市民社会を生み出す大事な役割を果たしつつある。その活動の今後に期待したい。